

批評的な読みの交流を通して、個の読みを広げ深めていく子どもの育成

— 中学3年「ウミガメと少年」の実践から —

1 授業の構想

(1) 子どものとらえについて

中学3年生に進級した生徒たちは、落ち着いた態度で日々の国語の学習に取り組んでいる。学級全体の前で自分の考えや思いを進んで積極的に述べるとなるとやや限られてしまう傾向があるが、小集団での話し合いの場では、大半の生徒が自分なりに考えを表現することができる。また、音読やスピーチでも、大きな声を出して取り組める生徒が多く、学習態度はおおむね意欲的である。

学年とともに学習材である文章の難度も上がってくる中、中学2～3年生という段階を考えると、文学的文章を読み味わう際には、登場人物の心情のみならず、文章そのものの構成や舞台設定、さまざまな表現の工夫などにも意識を向け、その背景にある作者の目的や意図にも考えを巡らせるなど、いろいろな角度から批評的な読みを展開し、確かな読みを形成していくことが望まれる。そこで、2年生の後期より、「形」（菊池寛）や「走れメロス」（太宰治）などの文学的文章を学習する際、批評的な視点から作品を読み取る学習活動を設定してきた。その中で、「形」においては他の短編小説との比較から、文章構成や表現上の仕掛けの工夫の効果とそこに込められた作者の意図に注目し、作品のもつ魅力について批評文を書くという活動に取り組んだ。以下は、生徒が書いた批評文の抜粋である。

新兵衛は最後死んでしまうが、この話によくある「高慢な嫌な奴が最後に報いを受ける話」ではない。新兵衛に悪かった点があるなら、それは「形」に対する自分と周りの見方にずれがあることに気づいていなかったことだ。この事は作品の主題と深く関わっている。この作品は「形」つまり「外観、外見が他人に及ぼす影響の強さ」を主題にしているのではないか。実際、身の回りには「形」が先走りして、内面、内容的な部分があまりみられていないことが少なくない。この作品にはそれがおろかなことだとは書かれていない。でも、新兵衛は死んでしまうのだ。 (生徒A)

人物設定の仕方や読者の考えに委ねる表現の巧みさに作者の意図を感じ取って自分なりに主題にせまろうとしており、授業で設定したポイントに注目し、作品を批評的に読み取ることを通して自分の読みを形成することにはある程度成功している。しかしながら、文章の読解力やベースとなる個々の読書経験などの個人差を鑑みると、こうした読みを個人内にとどめておくのではなく、授業の場で積極的に交流し合い、互いの読みを更新していくことが大切になると考えた。

(2) 本単元の目標や内容と国語科で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて

本学校の国語科では、特に「読むこと」の学習を通してものの見方や考え方を広げ、深めながら、「個の読み」を確立していくことをめざしている。そして、中等部（小6～中3）の各領域における思考力・判断力・表現力を、相手や目的に応じて批評しながら聞く力、構成や表現を工夫して書く力、表現の効果や構成などに注目しながら共感的・批評的に読む力と設定し、これらを通して自分の考えを広げ、深めていくこととしている。したがって、文章表現の工夫に注目し、客観的な視点から批評的に作品を読み解いていくことは、思考力・判断力・表現力を高めていく上で重要な要素であると考えられる。

本単元で扱った「ウミガメと少年」（野坂昭如）は、太平洋戦争末期の沖縄戦を背景に、沖縄の砂浜で産卵するウミガメの営みと、沖縄戦に巻き込まれた一人の少年の運命が対比的に描かれた短編小説である。戦争を扱った文学作品は、戦争体験が風化しつつある現代における平和学習の素材として意義深い反面、戦争から60余年が過ぎた現在の日本においては、状況や登場人物の心情についての生徒の実感が乏しく、表面的な読み取りにとどまりやすい傾向もまみられる。ただ、本校の3年生は4月に沖縄への修学旅行を経験し、その中で沖縄戦体験者の講話や平和祈念資料館、防空壕（ガンマ）の見学などの体験を伴った平和学習を行い、また、伊江島でのホームステイでは沖縄に暮らす人々の温かさにも実際に触れてきている。そのため、物語の状況や心情把握の際のギャップは比較的少ない状況にある。

そこで、この小説を単なる平和学習の素材として扱うのではなく、ファンタジー性を重視した文学作

品としての側面を重視して単元を構成することとした。そして、今まで学習してきた文学的文章の読み方を生かして、対比などの仕掛けや象徴的、暗示的表現などに注目しながら読み進め、読み取った内容を班や学級で交流していくことを通して、思考力・判断力・表現力を高めていく上で重要な批評的読み取りや、他者の読みを得ることでの自己の読みの修正、深化が可能になると考えた。

(3) 11年間で育てる思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

学習指導要領の項目「表現の仕方や文章の特徴に注意して読むこと」(読むことのウ)をふまえ、「ウミガメと少年」の読みを深めていく上で特に重要になる視点を、①少年とウミガメの目で戦争を二重にとらえている意味、②結末の少年の運命から読み取れるもの、の2点にまず絞り込んだ。

視点①については、ウミガメと少年は、沖縄という同じ場にながら、戦争のとらえ方で明確に区別されている点、また、少年の呼称がウミガメとの関わりでは「少年」と記述される一方、戦争との関わりでは「哲夫」という固有名詞で記述される点から、作品構造の二重性に注目させ、その意味を考えることで批評的に読む姿勢が養われるとともに、文章を根拠とした確かな読みが形成されると考えた。

視点②については、少年が海に滑り込んでいくという結末が、少年の生死を想像させる表現であると同時に、少年がウミガメとして転生したように読むこともできる点、また、再登場する大きなウミガメと小さなウミガメにより、少年の転生が象徴的に強調され、大海原へ泳いでいく様からは戦後世代が世界へ生のかたまりを移していく希望や厳しい生存競争への直面など、暗示的な読みが広げられる点などから、多様な読みの可能性を検討しあうことで、批評的な読みの姿勢をより鮮明にできると考えた。

本単元では、文章全体に幅広く目を向けることが可能な視点②を学び合う場面に設定した。昨年度までの実践で、学び合いを支えるためには、子どもに明確な目的意識が必要だと指摘されていた。そこで、ウミガメの卵を救おうとしていたはずの少年が卵を食べ、「海に滑り込んでいく」という結末部分のぼかした表現に注目させ、結局少年はどうなったのかを生徒が突き詰めたくないように授業を構成した。

結末部分は、ともすると海に入る＝少年の死という常識的な読み流れやすいが、小説の虚構性、特に本作品をファンタジーとして批評的に読むことを考慮すると、それまでの構成や伏線などの表現上の工夫に幅広く目を向けることが必要になる。よって、学び合いの場を授業の中に意図的に設定することで、読み取りの上でのつまづきを修正していくとともに、自分一人では気づかなかった新しい視点から文章を読み直す過程が生まれ、個々の読みに広がりや深まりをもたせることができると考えた。

学び合いを効果的に成立させるには、生徒の読みの進展を把握し、実態に応じてはたらきかけていくことが重要である。そこで、授業中の観察に加え、ノートの記述を随時確認し、学び合いの場面では、通常生活班で編成しているグループを意図的に再編することとした。実際の授業では、教師の発問や生徒の発言への評価はもちろんだが、本文の記述を根拠とするよう促すとともに、必要に応じて問い返すことで読みの根拠を自覚させたり、新たな着眼点を提示したりするはたらきかけを特に大切にしたい。

2 展開計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容 (◇印は、学級全体の学び合いの場面)
1	「ウミガメと少年」を読み、学習の見通しをもつ。	1	<ul style="list-style-type: none"> ・沖縄修学旅行で印象に残った体験を思い返す。 ・学習の目標を知り、今後の学習へ見通しをもつ。 ・「ウミガメと少年」を通読し、初発の感想を書く。
2	表現や仕掛けに注目し、「ウミガメと少年」の内容について読み深める。	2,3 4	<ul style="list-style-type: none"> ・注目すべき表現や仕掛けについて確認しあう。 ・戦争について、ウミガメと少年のとらえ方の違いを、文章構成や比喩、対比の巧みさに注目しながら比較し、整理する。 ・主人公の呼称の使い分け(「少年」と「哲夫」)について確認する。 ・結末で少年はどうなったのかを話し合い、読みを広げ深める。 ◇文章表現をふまえ、他者の読みも取り入れながら、少年の運命についての読みを深めている。

3	読みの広がり，深まりを確認する。	5,6	・学習過程を踏まえ，「ウミガメと少年」についての批評文を書く。 ・初発の感想を再読し，自己の読みの変化について整理する。
---	------------------	-----	---

3 学び合いによる思考力・判断力・表現力の評価

学び合いの場面における評価規準および評価基準は以下の通りである。

次	時	学習活動	学習活動における具体的な評価規準	評価資料	評価基準		
					A	B	C
2	4	結末で少年はどうかを話し合い，読みを広げ深める。	文章表現をふまえ，他者の読みも取り入れながら，少年の運命についての読みを深めている。	発言 ノートの記述	文章を根拠にして少年の運命を説得力ある形で読み取り，学び合いの中で自分の考えを述べつつさらに読みを深めている。	文章を根拠にして少年の運命について自分なりの考えを持ち，学び合いの中でその読みを深めている。	少年の運命についてのとらえ方が不十分で，学び合いの中でも自分の読みを深めていくことができない。

昨年度までの実践で，子どもの見取りや評価を含め，読みを中心とした学習過程にも書くことを効果的に位置づける意義が指摘されてきた。そこで，学び合いの場面だけでなく，授業ごとにノートにまとめを記述させ，内容を確認することで，生徒の読みを単元を通して把握するとともに，学び合いの場面でのグループ再編の資料として，生徒の実態に即した授業展開にも生かせるようにした。

加えて，本単元では，導入時にこれまでの学習を想起させ，批評的な視点から読むという前提に立って初発の感想をまとめさせ，結末で作品についての批評文を書いた際，改めて初発の感想に立ち返り読み比べることとした。二つを比較することによって，自分の読みの広がりや深まりを確認させるとともに，数値で図りにくい読みの力の向上を生徒自身が個々に実感できるようにすることを目指した。

4 授業の実際

(1) 学び合いへ向けてのグループ編成

生徒は，国語や他教科のグループ学習において生活班を母体とした話し合いを多く経験しているが，本単元においては，教師の側でグループを再編することとした。生徒個々の特性や日頃の人間関係を考慮しつつ，生徒の個々の読みの状況に応じて意図的にグループを編成することにより，生徒が試行錯誤しながらも自分たちの手で読みを変化・深化させていけるようにするためである。つまり，グループ編成そのものが，学び合いを活性化させるための重要なはたらきかけの一つであると言ってもよい。

グループの人数は，生徒が慣れ親しんでいる生活班での話し合いに近い形で行えるよう，4人×8班を基本とした。学び合いの中で互いに新たな視点を獲得しつつ，根拠をより突き詰めて考えていくには，異なる読みの者同士がグループ内で意見を述べ合うことが効果的だと考えられるが，4人グループであれば，司会者を一人立てても対立する双方の意見がスムーズに出し合えることも考慮している。

(ウミガメの卵を救おうとしていた少年は，日に日に弱り，よるめいた拍子に卵を一つ割ってしまうと，自ら卵を食べ出してしまう。) 卵の最後の一つをすすり込むと，少年は，フッと，満ちてきた潮に滑り入り，底へ沈んでいきました。あったかい，海の水が甘い。

学び合いの場面で検討する少年の結末の運命については，上のようにぼかした表現がとられている。そこで，学び合いの前時である3時間目の終わりにあらかじめこの部分を読んで問いを投げかけ，自分の考えとその根拠について端的に記述させたところ，以下のような結果となった。

・死んだ…18人 ・ウミガメになった…6人 ・死んだ/ウミガメになったを並記…3人 ・その他…4人

ただ，生徒が挙げた根拠は，いずれも結末部分とその周辺の記事にのみ着目したものがほとんどであり，読みをさらに広げ深めていくためには，文章の幅広い部分から根拠となる記述を見出し，検討し合

う必要性がうかがえた。そこで、異なる読みの者を組ませるばかりではなく、似た読みの者同士が協力し合って文章を読み直す中でよりよい根拠を見だし、読みを強固にしていくことが生徒の実態に即していると判断し、当初の予定を修正して以下のような編成とした。

- ・似た読みのグループ…4つ（少年は死んだ…3つ，少年はウミガメになった…1つ）
- ・異なる読み（死んだ／ウミガメになった）のグループ…3つ（2対2…2つ，3対1…1つ）
- ・その他の考えのグループ…1つ

(2) 学び合いの実際

4時間目の授業はまず、前時にまとめた自分の考えとその根拠となった記述をグループ内で発表し合った。この段階では、他のメンバーがどんな考えかを知らせていないため、生徒は集中して真剣に発表を聞き合っていた。次いで、グループ内での話し合いに移った。ここで取り上げるグループ（似た読みのグループ：少年はウミガメになった）の4人は当初、次のような根拠を挙げていた。

- 生徒A 生まれるはずだったカメの気持ちが少年に入ってきたのではないかと思った。普通に死ぬのなら「フット」（班長）なんて書かなくてもいいし、海に入る必要もないし、ウミガメの赤ちゃんは生まれると海に帰るので、そういうところからウミガメになったと考えた。
- 生徒B 「底に沈んでいきました。」とは、死んだのではなく深く潜っていったと考えた。「あったかい」とは、人間が入っても冷たいと思うので、カメが感じるのんびりした気持ちよさだと思う。
- 生徒C 「あったかい、海の水が甘い。」と書いてあり、これはウミガメならではの感覚なのか、それとも自由な世界を広い海にたとえて、自由になったのを喜んでいるのか、どちらかだと思う。
- 生徒D 書き出しで「お母さんガメが、子供に遭うことはありません、海という故郷は広すぎます。」と書いてあるのに、結末では小さなアオウミガメが島の方から泳いできて、大きなあのアオウミガメと出会っているから、小さなカメは哲夫だと思う。

生徒A・B・Cは、いずれも結末部分とその周辺にのみ根拠を求め、主観に頼った解釈もみられるのに対して、生徒Dは波線部のように、書き出しと結末部分に対応させた分析的な読みを展開していた。そこで、これを手がかりにグループの話し合いを活性化させるべく、資料1のようにはたらきかけた。

資料1 「ウミガメになった」グループでの話し合いの様子

- T1 このグループは「少年はカメになった」という考えでは一致しているんだよね。
- 生徒A そうです。
- T2 じゃあ、少し考えてみるよ。Dさんは、最初と最後を対応させて根拠を考えているね。
- 生徒D はい。
- T3 じゃあ、今考えている、少年が海に入るところと、カメの様子で、対応する部分なんてないかな。
(生徒たち、しばらく考える)
- 生徒D …あっ。
- T4 何か見つかったの。
- 生徒D 「フット」だ。
- 生徒A どこ、どこ。
- 生徒D 39ページの6行目。生まれた子ガメが、海に入るとき、「体が、フットと空気になったように軽く」って書いてあるのが、「フット、満ちてきた潮に滑り入り」と同じ。
- 生徒C 本当だ。すごい。
- T5 そうだね。こういうのが、探せば他にもあるんじゃないかな。カメと少年の行動を重ねて、伏線を張っているところをいくつも探していくと、読みで説得力が出てくるね。
- 生徒A そうか。じゃあ、みんなで前の方から読み直してみよう。

新たな着眼点を提示するはたらきかけ（T3破線部）によって、子ガメの海に入る様子の描写を結末への伏線としてとらえられることに生徒Dが気づき、それを共通言語化し認めるはたらきかけ（T5二重傍線部）によって、グループ内の話し合いが活性化した。資料2のように、このグループでは産卵から孵化の期間と沖縄戦終結から親子のカメが出会うまでの期間がほぼ一致していること、少年と子ガメが入っていく海がいずれも満潮であること、「あったかい、海の水が甘い」という表現がカメの卵を食べる表現と重なること、少年が沈んでいく海の底についても「潜っちゃえば、海はカメのもの」という記述があることなど、少年とカメの共通点を根拠として次々と指摘することができた。

グループでの話し合いの後、話し合いの結果をホワイトボードにまとめたものを掲示し、班長がポイントについて発表する形で、読みを学級全体で共有していった。ボードに提示された各グループのまとめは次のようになった。

- ・死んだ…2つ ・ウミガメになった…5つ
- ・一つの考えにはまとまらなかった…1つ

異なる読みを対立させた3つのグループは、話し合った結果、資料3のようにウミガメになったという読みにいずれも収束した。「あったかい、海の水が甘い」以外の根拠も探してみるようはたらきかけると、戦争や自分の家族に無関心になっていく少年の様子がカメと共通していることを見出し、自信をもって自分たちの読みを発表していた。

また、「少年は死んだ」という考えの生徒で編成したグループの一つは、資料4のように、話し合いの中で自分たちの読みを変更していた。根拠を検討する中で、「あったかい、海の水が甘い」という表現が羊水に包まれているような安心感を示しているのではないかと考えていたことから、「羊水は赤ちゃんを包んでいる水だから、母なる海のイメージで読みを深められそうだね」とはたらきかけると、結末の小さなアオウミガメの出現と結びつけ、少年はカメに生まれ変わったと結論づけていた。やや強引な読みではあるが、学び合いの中で読みを広げた例として興味深いものだった。

資料5 授業後の生徒のふりかえり

・カメになったという意見を聞いて、「ああ、そうなんだ」と思うことが多かったのですが、私はやっぱり少年は死んでしまったと思います。たしかに、終わり（結末）に向かってカメの思考に似てきているとは感じますが、カメになったと考えると、卵を抱いてうずくまったり、卵をすすり込むことはないと思います。

（「少年は死んだ」という読み…3人）

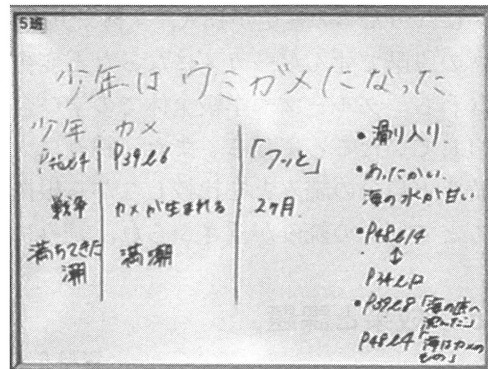
・他の人の意見を聞いて、やはり少年はカメになったのかなと思いました。ここからは予想ですが、カメの卵とともに哲夫はカメになり、すべて元の状態に戻ることで、本当に戦争が終わり平和が訪れたのだと思います。

（「少年はウミガメになった」という読み…21人）

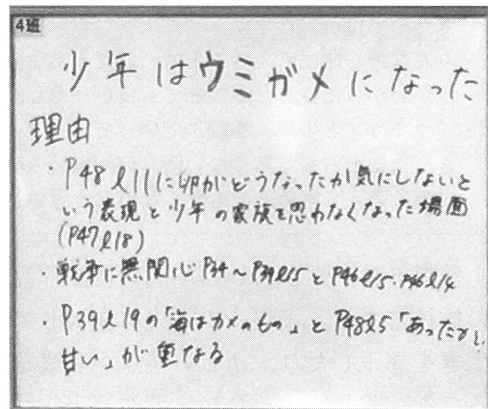
・班の中では自分が気づかなかったことが出てきて、「少年は死んだ」という自分の結論が強調されましたが、他の班の意見を聞くと、反対の意見の中にも「ああ、なるほどな」と思うものがたくさん出てきて、とても決めきれなくなりました。

（どちらかに決めかねている／その他の読み…7人）

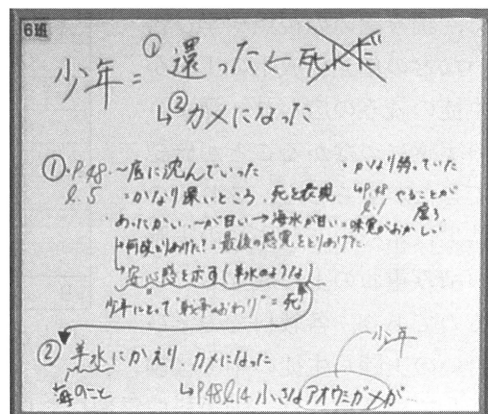
資料2 「ウミガメになった」グループのまとめ



資料3 対立させたグループのまとめ



資料4 読みを変更したグループのまとめ



授業での読みの変化をまとめると、グループでの話し合いの段階で、死んだ／2つの考えを並記→カメになったへの変更が13人、全体で共有する段階では、死んだ→決めかねているへの変更が4人、グループの段階で死んだ→カメになったと変更したがさらに決めかねているへと変更した生徒が1人いた。すなわち、グループや学級全体での学び合いの場面において、クラスの半数以上が自分の読みを大幅に見直していたことになる。また、読みに大きな変更がなかった生徒も、多くが資料5のように他の生徒の読みと自分の読みとを比較しながら根拠を再検討しており、他者の読みに出会う学び合いの過程を経ることで個々の読みが揺さぶられ、読みに広がりや深まりが生まれていることが確認された。

5 成果と課題

資料6 単元の学習を終えての生徒の感想

- ・初めて読んだときは大まかな流れがつかめず苦労したけど、ウミガメと少年の視点を比べることで、流れだけでなく表現についても読みを深められました。対比について考えるのは難しかったけど、友達の意見を聞きながら理解ができたので良かったです。
- ・みんなと一緒に考えることで、ふだんあまり発表しない人の意見が聞けたり、グループ活動じゃないと出てこない意見がわかったりしたのがとても良かったし、自分の考えも最初より読みが広がったと思います。
- ・「ウミガメと少年」を読んでいって、すごく深いところまで考えられたんじゃないかと思います。ふだん本を読むとき、よほどおもしろくない限り何回も読み直さないし、文の効果とか対比とか深く考えて読まないけど、何回も読んで深く考えて極めるのも悪くないなと思いました。

資料6は、学び合いの場面の後、作品についての批評文を書き、初発の感想を読み返した上での感想の抜粋である。表現上の工夫に注目して読み進め、学び合いの場を経ることで、文章の読み取りのつまづきを修正したり、新しい視点から文章を読み直したりと、個々の読みに広がりや深まりが生まれていること、そして、それが学習や読書生活への新たな意欲につながっていることもうかがえた。

資料7を見ても、A-①・

②・④・⑤の値が相対的に高く、読み深めの視点や学び合いなどの単元構成上の工夫が生徒の読みの広がり・深まりの実感につながる事が確認できた。もちろん、これらの結果は本校のこれまでの実践の積み重ねの上に成立しているものであり、各教科での学び合いの実践が生徒の中で経験

資料7 単元終了後の意識調査の結果

A	次の学習活動が、読みを広げたり深めたりするのに役立ったと思う。	
	①グループで話し合い、考えを検討、共有したこと。	3.71
	②話し合った結果をボードにまとめ、全体で共有したこと。	3.63
	③表現の工夫に注目して、作品を読み進めたこと。	3.44
	④ウミガメと少年の視点对比について考えたこと。	3.71
	⑤結末部分で少年がどうなったか考えたこと。	3.61
	⑥批評文を書き、作品を読み合ったこと。	3.37
	⑦初発の感想を読み返し、読みの変化・深化を確かめたこと。	3.21
B	この単元の学習を通して、自分の読みの力が向上したと思う。	3.34

4 とてもそう思う 3 ある程度そう思う 2 あまりそう思わない 1 全くそう思わない

として積み重なり、国語科の学習においても自信をもって取り組める基盤となっている。一方、A-⑦の値は相対的にやや低く、初発の段階で批評的な観点を意識して感想をまとめることは、生徒にとって不慣れな学習活動であり、自信をもって取り組みにくかったと考えられる。また、一読しただけではやや難解な「ウミガメと少年」の場合、初発の感想と批評文の内容のギャップが大きくなりやすく、読みの向上を実感しにくかったとも考えられる。初発の感想をその後の学習にどう生かしていくか、感想を書く際の課題の提示のしかたなど、効果的なはたらきかけについては引き続き検討していきたい。

本実践では、グループを意図的に編成することで、個々の読みのレベルやクラスの実態に応じた学び合いのコーディネートが可能になることが示唆された。しかし、そのためには、生徒の読みの状況を詳細に把握することが必要であり、文章記述を中心に個々の読みの変化・深化を把握、評価していくことも考えると、授業の準備から実践、評価までの労力が多大になることは否めない。今後は、単元の中で何を重視し、ねらいを達成するためにどこに学び合いを設定し、その成果をどう評価していくかなど、よりよい単元構成や評価のあり方についてさらに検討する必要があるだろう。（文責 籠橋 剛）